

## 1. 序言

かつて「韃靼館雑字のh-について」(2003年5月)と題して小論を公表したことがある<sup>1</sup>。ここでは『韃靼館雑字』(所謂乙種本。15世紀末か)という文献<sup>2</sup>の背後にある蒙古語において、/q-/は摩擦音化しており、その前提として語頭の摩擦音/h-/は消滅していたとした。現在もこの考えに変わりはないが、当時はアイデアの開陳という程度であり議論の進め方にも不適当な部分があった。今回はいまま少し資料を補足し再度この問題について考えてみた次第である。なお現在の結論としては次のとおり。『韃靼館雑字』は『華夷訳語甲種』の音訳漢字をほぼそのまま引き写した音訳漢字の部分とそれを蒙古文字に復元した部分より成るわけであるが、蒙古文字を復元した人物の背後にある蒙古語の口語において少なくとも語頭の旧/q-/は摩擦音化して/χ-/となっていた。語頭の旧/h-/の方はその大半は消滅していたけれども一部に/h-/が見受けられる。この一部の/h-/を擬古的な異音と見なしゼロ/θ-/と並存していたと想定する。以上である。なお慣用としてh-で表記される語頭の摩擦音の詳細は不明であるが現代のシラ・ユグル語(東部裕固語)では声門摩擦音[h]であり、q-の方は口蓋垂摩擦音[χ]となっている。両者の間には音韻的な対立が認められる<sup>3</sup>。そこで本稿ではそれぞれを/h-/、/q-/、/χ-/(/q-/が摩擦音化したもの)、/θ-/と表記することとした。もっともこの音韻表記は体系的な検討を加えた結果ではなく議論を進めるうえでの便宜的なものである。

## 2. 沿革の俯瞰

Janhunen(2011)に提示されているMiddle Mongolian(中期蒙古語)の語頭の/h-/および音節初頭の/gh-/ (文語γに相当)、/g-/、/q-/、/k-/に対応する歴代の資料の状況を俯瞰すると次のようになる<sup>4</sup>。漢字表記は母音の/a/と/e/を付したものの内代表的なものを採録した。

<sup>1</sup> まず対音対訳資料研究会(1999.3.21-22。於富山大学)で資料を配付した。その後研究会の資料に基づいて小論吉池孝一(2003)を公表した。

<sup>2</sup> 東洋文庫所蔵の舊鈔本韃靼館雑字による

<sup>3</sup> 照那斯圖(1981)の子音表(6頁)および語彙表(93-107頁)によると、『星』[hodan]と『虫』[χoroχgui]、『手掌』[halavan]と『熱』[χaluun]。Svantesson et al. (2008)の‘COMPARATIVE VOCABULARY’(pp. 155-177)によると、‘ten’/harwan/と‘black’/xara/、‘year’/hɔn/と‘far’/xɔlɔ/。

<sup>4</sup> アラビア文字資料については私の能力に係わることであるがその詳細を知り得ないのでやむなく除外した。

所謂男性母音の語例は前に、女性母音の語例は後に配した。点線によって時代別にまとめている。なおこの表は、中村雅之(2003)と吉池孝一(2003)の表により新たに作製したものであり、蒙古語の現代方言はSvantesson et al. (2008)の‘COMPARATIVE VOCABULARY’によった。

中期蒙古語	語頭のha・he	gha	ge	qa	ke
【元代】・・					
パスパ字蒙古語(13C後半)	h	q	g	q	k <sup>ʰ</sup>
蒙古字蒙古語(13C後半) <sup>5</sup>	∅-	X-	K-	X-	K-
至元訳語(13C後半)	合・脅黒/x/	合/x/阿/∅/	劫哥/k/	匣合下/x/	怯可/k <sup>h</sup> /
【明代】・・					
華夷訳語甲種(1389)	哈・赫/x/	中合/x/	格/k/	中合/x/	客/k <sup>h</sup> /
元朝秘史(14C後半)	哈・赫/x/	中合/x/	格/k/	中合/x/	客/k <sup>h</sup> /
韃靼館雑字(15C末か)	哈・赫/x/	哈/x/	格/k/	哈/x/	客/k <sup>h</sup> /
【清代】・・					
清文鑑(満洲文字18c)	∅-	g	g	h	k
蒙語老乞大(ハングル18c)	∅-	g	g	h	k
【現代】・・					
ハルハ	∅-	g	g	x	x
チャハル	∅-	k	k	x	x
シラ・ユグル	h	k	k	x	k <sup>h</sup>

\*チャハルとシラ・ユグルの/k/は無声無気音

〈表1〉

表1の文献資料の質であるが、『至元訳語』は別として、明代の訳語は公的な機関で作られたものであり清代の資料は外国人が学ぶべき蒙古語を扱ったものであるからいずれもそれほど互いに関わり離れたものではなく、標準的な蒙古語と見なしうる範囲内のものと想像する。そういった意味において標準的な蒙古語の沿革の概略は表1によって見て取ることができるとして議論をすすめたい。現代の主要な蒙古語であるハルハ方言やチャハル方言では、中期蒙古語に見られる語頭の/h-/は/∅-/ (ゼロ)となり、音節初頭の旧/q-/および旧/k-/はともに摩擦音となる。旧/k-/については『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』<sup>6</sup>(満洲文字)や『蒙語老乞大』<sup>7</sup>(ハングル)により18世紀まで破裂音の/k-/であったことがわか

<sup>5</sup> 元代の蒙古字蒙古語は中村淳・松川節(1993)による。

<sup>6</sup> 東洋文庫本による。

<sup>7</sup> 『國學資料第三輯 蒙語老乞大』(西江大學校 人文科學研究所, 1983年)による。井上治

るから、問題は語頭の旧/h-/の消失の時期と音節初頭の旧/q-/の摩擦音化の時期の二つということになる。なお、蒙古語の現代方言・諸語の旧/h-/および旧/q-/の在り方からみて両者の沿革の道筋は概略次節のようなものであったと考える。

### 3. 沿革の道筋

Janhunen(1999)は語頭の旧/h-/の消失が収束してから音節初頭の旧/q-/の摩擦音化が始まるとする<sup>8</sup>。同様に吉池(2003)は、語頭の旧/h-/の消失の傾向が収束して初めて旧/q-/の摩擦音化が始まるとみななければならない、旧/q-/の摩擦音化が見られるならばその前提として語頭の旧/h-/は既に消失しているはずだとした。しかしながら先に挙げたシラ・ユグル語のように旧/h-/に由来する/h-/と旧/q-/に由来する/x-/との間に音韻的な対立があるとする、旧/h-/と旧/q-/の沿革の道筋は簡単ではなく幾つかに分けなければならない。Janhunen(1999)や吉池(2003)のような考えをそのまま認めるわけにはいかないのである。なお古代蒙古語に\*pを認めるとして、それが中期蒙古語で摩擦音化し摩擦騒音の微弱な声門音の/h-/となり、中期蒙古語の破裂音/q-/が摩擦音化して摩擦騒音の顕著な口蓋垂音の/x-/となるというようなことは音声的にあり得ることなので、そのような前提により議論を進める。さて、Janhunen(1999)はダグール語やモンゴル語では旧/h-/と旧/q-/の両者が区別されない場合があると指摘するが<sup>9</sup>、そうであるならば、これらの言語ではシラ・ユグル語(/h-/≠/x-/)の状態の後、/h-/が/x-/に合流し現在に至ったと考えてよい<sup>10</sup>。一方、ハルハ方言やチャハル方言では両者の区別は保たれるのが普通であるから/h-/が/x-/に合流することはなかったとしなければならない。以上を要するに旧/h-/と旧/q-/の沿革の道筋について次のような幾筋かが考えられる。

I. 旧/h-/と/x-/ (旧/q-/に由来)とが音韻として対立した時期はなく、旧/h-/が消失し

---

(2002)参照。

<sup>8</sup> ‘It may be recalled that after the completion of the development  $*p > *f > (*x) > \emptyset$ , a new cycle of spirantization was initiated in Mongolic, this time affecting the velar member of the strong stop series. The development of  $(*k)$  to  $x$  is variously observed in almost all Modern Mongolic idioms, though it is often restricted to the allophone occurring before back vowels.’ (p. 117)

<sup>9</sup> ‘It may be noted that in Dagur and Monguor, under certain circumstances, we observe a merger between the secondary  $(*x)$  and the tertiary  $x$ .’ (p. 119)。ここで言う ‘the secondary  $(*x)$ ’ は\*bから変化した中期蒙古語の語頭の/h-/を指し、‘the tertiary  $x$ ’ は旧/q-/が摩擦音化したものを指す。

<sup>10</sup> Svantesson et al. (2008)の ‘COMPARATIVE VOCABULARY’ (pp. 155-177)によると、‘ten’ \*harpan のダグール語/xarpə/・モンゴル語/xaran/で、‘black’ \*k<sup>h</sup>ara のダグール語/xar/・モンゴル語/xara/。‘year’ \*hon のダグール語/xɔɔn/・モンゴル語/xon/で、‘far’ \*k<sup>h</sup>ola のダグール語/xɔl/・モンゴル語/xolo/となる。

た後に旧/q-/が摩擦音化/x-/した ……ハルハやチャハル

II. 旧/h-/と/x-/ (旧/q-/に由来)とが音韻として対立する時期があった

II-1. 対立の後、旧/h-/は消失し/x-/のみとなった ……ハルハやチャハル

II-2. 対立の後、旧/h-/は/x-/に合流した ……ダグールやモンゴル

II-3. 対立が保たれた ……シラ・ユグル

ハルハ方言やチャハル方言は可能性として I と II-1の2つの道筋の何れかを通ったと考えられる。『韃靼館雑字』は明の四夷館という公的機関で作成されたものであるからには現代の主要な方言に繋がる性格を有していたと見て、まずは I もしくは II-1という沿革の道筋にあると想定し作業を進めてよいであろう。その想定に立ちつつ次節において『韃靼館雑字』の状況を精査する。

#### 4. 『華夷訳語甲種』と『韃靼館雑字』

『華夷訳語甲種』(1389年)と『韃靼館雑字』(15世紀末か)とは、内容および漢字の用法がほぼ一致しており、後者は前者を引き写しつつ音訳漢字を簡略化したものと考えられる。もっとも少数ながら異なる漢字を使用した部分がある。また『韃靼館雑字』には蒙古字蒙古語が付されている。この蒙古文字の用法には元代の蒙古字蒙古語および伝統的な文語のそれと異なる部分があり、当時の音韻の状態を知る大きな手がかりを提供してくれる。

以下、『華夷訳語甲種』で蒙古語の語頭の/h-/を想定することのできる語彙を選出し対応する『韃靼館雑字』を付して両者の相違点を確認する<sup>11</sup>。語頭の音訳漢字には近世漢語の声母の音韻を“火/x/”のようにして付す。『韃靼館雑字』の蒙古字蒙古語はXをq、Kをk、Wをu、WYをüで翻字する。文語はMostaert1977によった。語彙に付した番号は『華夷訳語甲種』のもの。『韃靼館雑字』も同一であるが“446. 牧羊人”と“448. 牧牛人”の順番のみ入れ替わり、『韃靼館雑字』では“446. 牧牛人” “448. 牧羊人”となる。

華夷訳語甲種		韃靼館雑字		文語
		漢字	蒙古文字	
004. 星	火/x/敦	火/x/敦	udun	odun
007. 烟	忽/x/紉	忽/x/紉	ünin	uniyar
023. 林	槐/x/	槐/x/	üi	oi
063. 年	桓/x/	桓/x/	un	on
087. 柳	希/x/扯孫	希/x/扯孫	ičesün	---
098. 根	忽/x/札兀兒	忽/x/札兀兒	uǰaqur	iǰayur

<sup>11</sup> 旧/h-/を持つ語彙の選定にあたって Mostaert(1977)を参照した。

101. 種子	許/x/舌列	許/x/列	ür-e	üre
132. 牛	忽/x/格兒	兀/Ø/格兒	üker	üker
141. 狐	忽/x/捏干	忽/x/捏干	üneken	ünegen
169. 蜘蛛	哈/x/阿里真	哈/x/阿里真	aqaljin	aɣalja(n) aɣalji(n)
170. 蛾	赫/x/兒別該	赫/x/兒別該	erbekei	erbegekei, erbekei
192. 鳶	赫/x/列額	赫/x/列額	eleke	eliye
291. 囊	呼/x/呼塔	呼/x/呼塔	uquta	uɣuta
341. 氈襪	闊/k <sup>h</sup> /亦抹孫	濶/k <sup>h</sup> /亦抹孫	quyimusun	oyimasun, oyimosun
347. 線	忽/x/答孫	忽/x/答孫	qudasun	utasun
435. 孫	阿/Ø/赤 (文例は哈/x/赤)	阿/Ø/赤	ači	ači
448. 牧牛人	忽/x/格赤	446. 兀/Ø/格兒赤	ükerči	ükerči(n)
539. 送	許/x/迭	許/x/迭	üde	üde-
540. 愁	赫/x/魯模	赫/x/魯木	qayilumu	---
542. 羞	喜/x/扯	喜/x/扯	iče	iče-
544. 嗔	孩/x/抹思八	孩/x/思抹八(ʔʔ)	ayimusba	ayimas-
578. 翻	忽/x/兒八	忽/x/兒八	qurba	urba-
590. 拴	忽/x/牙	忽/x/余	quy-a	uya-
604. 報恩	哈/x/赤 <sup>中</sup> 合 <sup>舌</sup> 里温	阿/Ø/赤哈里温	ači qariqul	ači
616. 恐嚇	哈/x/阿黑藍	哈/x/阿黑藍	aqaqqlan	---
617. 紅	忽/x/刺安	忽/x/刺安	ulaqan	ulayan
643. 十	哈/x/兒班	哈/x/兒班	arban	arban
680. 眉	哈/x/泥思 <sup>中</sup> 合	哈/x/泥思哈	qanisq-a	anisqa
682. 髮	許/x/孫	許/x/孫	üsün	üsü(n)
684. 唇	忽/x/舌 <sup>中</sup> 俞 <sup>勒</sup>	忽/x/羅勒	qurul	uruyul
695. 掌	哈/x/刺 <sup>中</sup> 罕	哈/x/刺罕	alaqan	alaya(n)
701. 肝	黑/x/里干	黑/x/里干	eliken	elige(n)
747. 西	呵/x/羅捏	阿/Ø/羅捏	ürün-e	örüne
761. 底	喜/x/舌 <sup>中</sup> 魯阿兒	喜/x/魯阿兒	iruqar	iruyar, iruyal

773. 虚	豁/x/黒脱兒忽	斡/θ/黒脱兒忽	uqturqu	oytarγui
791. 狹	希/x/兀壇	希/x/兀壇	iküten	uyitan
837. 無妨	兀祿哈/x/里札忽	兀祿哈/x/里札忽	ülü aljaqu	alja-, aljiγa-

〈表2〉

『華夷訳語甲種』の語彙編の音訳漢字には語頭の/h-/に対応して、漢字音/x/を使用するものが35例、語彙編で漢字音/θ/とし文例で漢字音/x/とするもの1例(435番の孫)、漢字音/k<sup>h</sup>/とするものが1例、合計37例ある。この『華夷訳語甲種』の37例に対応する『韃靼館雑字』をみると音訳漢字の異なる部分がある。また、『韃靼館雑字』の蒙古文字表記と伝統的な文語の表記とが異なる部分がある。その意味するところを次節以降で検討する。

### 5. 語頭の/h-/の不記

『韃靼館雑字』は『華夷訳語甲種』の表記法をほぼそのまま引き継いでいるようであるが、蒙古語の語頭の旧/h-/について異なる漢字を用いたものが5例ある。

華夷訳語甲種		韃靼館雑字		文語
		漢字	ウイグル文字	
132. 牛	忽/x/格兒	兀/θ/格兒	üker	üker
448. 牧牛人	忽/x/格赤	446. 兀/θ/格兒赤	ükerçi	ükerçi(n)
604. 報恩	哈/x/赤 <sup>中</sup> 合 <sup>平</sup> 里温	阿/θ/赤哈里温	ači qariqul	ači
747. 西	呵/x/羅捏	阿/θ/羅捏	ürün-e	örüne
773. 虚	豁/x/黒脱兒忽	斡/θ/黒脱兒忽	uqturqu	oytarγui

『華夷訳語甲種』語彙編で語頭の旧/h-/に漢字/x//k<sup>h</sup>/が対応する36例中、『韃靼館雑字』では上記の5例がゼロ/θ-/に書き換えられている<sup>12</sup>。この/θ-/が何を意味するか。『韃靼館雑字』の音訳漢字を付した人物の背後にある蒙古語では、①文字通り語頭の/h-/を有し一部の語のみが/θ-/となっていたのか、②それとも音訳漢字は擬古的なものであり実際はすでに語頭の/h-/はすべて/θ-/となっていたため一部分に実際の音/θ-/が顔を出したということであるのか、これだけでは確かなことは分からない。なお、上記5例の韃靼館雑字の蒙古文字表記が/θ-/であるのは元代の蒙古字蒙古語や後代の文語の正書法と一致する。しかしながら次節のように正書法と異なる蒙古文字の表記もみられる。この蒙古文字によって音訳漢字から知りえない当時の蒙古語の音韻の一端をうかがい知ることができる。

<sup>12</sup> 語頭の旧/h-/の消滅に言及した早いものに山崎忠(1951)がある。“(448)牧牛人(漢語)に対する忽格赤(甲蒙)は、乙種本では兀格兒赤(ügerçi)(446)とある。甲本は格の次の兒を落したものと考える。因に、語頭のhは乙種本では消滅していることを知る。”(61頁)。

## 6. 語頭の旧/h-/を蒙古文字q-で表記する例

次に『韃靼館雑字』の蒙古文字表記と文語の表記とが異なるものを挙げる。

	華夷訳語甲種	韃靼館雑字		文語
		漢字	蒙古文字	
341. 氈襪	闊/k <sup>h</sup> /亦抹孫	濶/k <sup>h</sup> /亦抹孫	quyimusun	oyimasun, oyimosun
347. 線	忽/x/答孫	忽/x/答孫	qudasun	utasun
540. 愁	赫/x/魯模	赫/x/魯木	qayilumu	---
578. 翻	忽/x/児八	忽/x/児八	qurba	urba-
590. 拴	忽/x/牙	忽/x/余	quy-a	uya-
680. 眉	哈/x/泥思 <sup>中</sup> 合	哈/x/泥思哈	qanisq-a	anisqa
684. 唇	忽/x/舌 <sup>中</sup> 倫 <sup>勤</sup>	忽/x/羅勒	qurul	uruyul

\*341は文語および蒙古語諸方言からみて語頭の/h-/を想定することができるけれども漢字表記では破裂音を用いている。

語頭の旧/h-/は蒙古文字の正書法では表記されないはずであるが、『韃靼館雑字』の蒙古字蒙古語では上の例のように文字q-をもって表記する場合がある。このような蒙古文字q-の用法について、Pelliot(1948)は上記680の眉hanisqaという語を取り上げ、蒙古文字でanisqaと復元すべきところをqanisqaとするのは蒙古文字への復元が機械的に無検討になされたためであるとした<sup>13</sup>。さらにMostaert(1977)はPelliotの言を引用しつつ、明らかに蒙古語の基本的な規則を知らない者たちの手によるものだと断じた<sup>14</sup>。要するに、蒙古語の語頭の旧/h-/も旧/q-/も区別なく“哈/x/”などで漢字音訳されたため、この漢字表記によって機械的に蒙古文字のq-をもって復元したというのである。この説によれば、蒙古文字q-の復元に蒙古語の音は介在していないということになるが、果たしてそうであろうか。次節では蒙古語の音が介在しているという見方もあるということについて述べる。

## 7. 音訳漢字と蒙古文字との対応

<sup>13</sup> “Dans *T'oung Pao*, XXXV I I [1944], 74, n. 3, j'ai montré par l'exemple de *hanisqa* du vocabulaire de 1389, qui aurait dû être rétabli en *anisqa* on écriture mongole, mais l'a été sous celle de *qanisqa*, que cette remise en écriture mongole a été faite d'une manière mécanique et sans critique.” (277 頁)

<sup>14</sup> “Comme l'a déjà noté Pelliot, «cette remise en écriture mongole a été faite d'une manière mécanique et sans critique», évidemment par des gens qui ne connaissaient pas les règles fondamentales de la langue.” (序XIII)

上で検討した語頭の旧/h-/について、漢字音訳蒙古語の語頭の漢字音にどのような音を用いるか。その漢字音にどのような蒙古文字を対応させているか。この二点によって『韃靼館雑字』中の旧/h-/をまとめると次のようになる。

『韃靼館雑字』中の旧/h-/の総計37例

■漢字/x/で音訳するもの30例

- ・蒙古文字q-+男性母音が対応するもの6例
- ・蒙古文字θ-+男性母音が対応するもの12例
- ・蒙古文字θ-+女性母音が対応するもの12例

■漢字/k<sup>h</sup>/で音訳するもの1例

- ・蒙古文字q-+男性母音が対応するもの1例

■漢字/θ/で音訳するもの6例

- ・蒙古文字θ-+男性母音が対応するもの3例
- ・蒙古文字θ-+女性母音が対応するもの3例

次節以降で上記のまとめに従って順次検討する。

## 7.1. 漢字/x/に対応する蒙古文字

漢字音訳蒙古語の語頭に忽/x/や哈/x/など喉の摩擦音を使用する例は122にのぼる。『韃靼館雑字』は漢字音訳蒙古語を蒙古文字に復元しているわけであるが、どのような蒙古文字に対応させるかをみると3種となる。以下に挙げる7.1.1は「忽/x/哈/x/」などに「蒙古文字q-+男性母音」を対応させるもので最も多い。そして7.1.2は「蒙古文字θ-+男性母音」を対応させるもの、7.1.3は「蒙古文字θ-+女性母音」を対応させるもの。やや煩瑣となるがすべての例を上げて検討する。

### 7.1.1. 漢字/x/に「蒙古文字q-+男性母音」が対応する場合

漢字/x/に「蒙古文字q-+男性母音」が対応するものは98例ある。98例のうち旧/q-/であるものが92例で、旧/h-/であるものが6例となる。旧/h-/は正書法では蒙古文字θ-で表記されるから、この6例は正書法上の違例ということになる。なお、漢字に前置した数字は『韃靼館雑字』の語彙に振った番号。番号の後の漢字は語頭に使用されるもの。下線\_\_\_\_\_を付したものは中期蒙古語で語頭に/h-/を持つもの。

漢字音訳蒙古語の語頭

蒙古文字蒙古語

013忽020哈026豁028忽058哈072哈076哈102豁108火112哈  
113哈114哈133豁135哈136哈146哈152哈161忽163忽164忽  
175哈175豁176豁184哈190哈194哈197哈199忽206渾215哈

222火232忽238哈241哈248豁252哈262哈269哈271忽278哈  
 286罕305忽316孩322哈325豁328忽343哈361哈365忽372豁 ⇨ 蒙古文字q-+男性母音  
 381哈391哈429哈430哈438哈443忽448豁476忽503哈508哈  
 516忽535哈543豁554哈561哈563哈584忽589哈592哈596忽  
 597忽606忽609含621哈635豁636忽644豁645忽662哈674哈  
 675哈685豁693哈696忽699哈707哈753哈755豁803哈808哈  
 814忽826哈347忽540赫578忽590忽680哈684忽 \* 下線部は旧/h-/

### 7.1.2. 漢字/x/に「蒙古文字0-+男性母音」が対応する場合

漢字/x/に「蒙古文字0-+男性母音」が対応するものは12例ある。すべて旧/h-/の語であり、旧/h-/は正書法では蒙古文字0-で表記されるから、この12例は正書法に叶った例ということになる。

004火063桓098忽169哈291呼544孩616哈617忽643哈695哈 ⇨ 蒙古文字0-+男性母音  
761喜837哈 \* 下線部は旧/h-/

7.1.1と7.1.2の例はすべて男性母音の語である。ここで議論の便宜として、まず男性母音の語の表記のみについて検討し、女性母音の語は7.1.3で検討することにする。さて『韃靼館雑字』には、語頭が摩擦音の漢字/x/である男性母音の語は110例ある。この110例は、中期蒙古語で/q-/であったもの92例、/h-/であったもの18例からなる。蒙古文字を復元した人物は、この/h-/であった18例から12例を抜き出して蒙古文字0-で表記し(7.1.2)、6例は蒙古文字q-で表記した(7.1.1)。一瞥する限りにおいては、蒙古文字の正書法では語頭の旧/h-/は表記せず0-とするから12例については正しい処置であり6例は誤表記ということになるのであるが、何に拠ったならば12例に蒙古文字0-を付し、6例に蒙古文字q-を付すということが起り得るのであるだろうか。漢字表記は同一であるので参考にはならない<sup>15</sup>。私は次の3点によってそのようなことが起ったと考える。

①旧/q-/と旧/h-/を区別無く漢字/x/で表記している110例の中から、旧/h-/である12例

<sup>15</sup> 『華夷訳語甲種』は/qa/を“<sup>甲</sup>合”で/ha/を“哈”で音訳する。“<sup>甲</sup>”の有無で両者を区別する。『韃靼館雑字』はこのような音訳法を参照して/q-/から/h-/を選び出したとも考えられる。しかしながら『華夷訳語甲種』の旧/q-/の92例中“<sup>甲</sup>”が無いものが26例に及ぶ。『華夷訳語甲種』の/q-/の表記において小字“<sup>甲</sup>”が付かない場合があることについて、栗林均(2003)は“これは、不注意で小字「<sup>甲</sup>」を書き忘れた可能性も考えられるが、以下に示すように、こうした表記が相当の数に上ることを考え合わせると、モンゴル語のqで始まる音節を表すのに小字「<sup>甲</sup>」を付けない音訳方式が行われたという可能性も否定できない。”(前書きv)とする。仮に小字“<sup>甲</sup>”の有無によって/q-/と/h-/を紛れることなく書き分けた理想的なテキストがあったとして、347 忽 540 赫 578 忽 590 忽 680 哈 684 忽の6例を区別できずに蒙古文字q-で復元したことについて説明が困難となる。

を歴史的には/h-/であるというような知識のみによって誤りなく抜き出して蒙古文字 $\emptyset$ -で記すことは容易ではない。音の違いに拠って選び出したと考えたほうが自然であろう。音の違いであるとするならば次の4種を挙げることができる。

旧/q-/		旧/h-/	
漢字/x/, 蒙古文字q-		漢字/x/, 蒙古文字 $\emptyset$ -	
a. 92例/q-/	vs.	12例/h-/	・・・中期蒙古語のあり方
b. 92例/q-/	vs.	12例/ $\emptyset$ -/	
c. 92例/ $\chi$ -/	vs.	12例/h-/	・・・シラ・ユグル語のあり方
d. 92例/ $\chi$ -/	vs.	12例/ $\emptyset$ -/	・・・ハルハ方言、チャハル方言のあり方

②旧/h-/の18例のうち、6例については旧/q-/と区別することができず、旧/q-/と同様に蒙古文字q-で表記した。そうであるならば蒙古文字q-で表記される旧/q-/は摩擦音化して/ $\chi$ -/のような音となっていなければならない。それでこそ蒙古文字q-で摩擦音を保っていた旧/h-/を表記することができる道理である。そうであるならば蒙古文字を復元した人物の音韻は①のcもしくはdということになる。

旧/q-/		旧/h-/		旧/h-/
漢字/x/, 蒙古文字q-	=	漢字/x/, 蒙古文字q-	≠	漢字/x/, 蒙古文字 $\emptyset$ -
92例/ $\chi$ -/		6例/h-/or/ $\chi$ -/		12例/?/

③旧/h-/の18例につき、②で述べたように蒙古文字q-で表記された6例は/ $\chi$ -/もしくは/h-/であったとして、残りの蒙古文字 $\emptyset$ -で表記された12例の音価が問題となる。両者を蒙古文字q-と蒙古文字 $\emptyset$ -で表記し分けたわけであるから何らかの音の違いがあったはずである。蒙古文字の $\emptyset$ -は正書法によったのではなく、実際の音の/ $\emptyset$ -/によって付した、とみて12例を/ $\emptyset$ -/としたならば無理はないであろう。蒙古文字を復元した人物の音韻は①のdであったということになる。

以上を要するに、92例の旧/q-/はすべて摩擦音の/ $\chi$ -/となっており、旧/h-/の18例のうち12例は/ $\emptyset$ -/、6例は/ $\chi$ -/もしくは/h-/となっていた。すなわち、旧/h-/の12例は/ $\emptyset$ -/となっていたので蒙古文字 $\emptyset$ -で復元し、旧/h-/の6例は/ $\chi$ -/もしくは/h-/となっていたので蒙古文字q-で復元したと説明することができる。つぎに女性母音の語について検討する。

### 7.1.3. 漢字/x/に「蒙古文字 $\emptyset$ -+女性母音」が対応する場合

漢字/x/に「蒙古文字 $\emptyset$ -+女性母音」が対応するものは12例ある。すべて旧/h-/の語であり、旧/h-/は正書法では蒙古文字 $\emptyset$ -で表記されるから、この12例は正書法に叶った例ということになる。

007忽023槐087希101許141忽170赫192赫539許542喜682許 ⇔ 蒙古文字 $\emptyset$ -+女性母音

701黒791希

中期蒙古語で語頭の/h-/を持っていた女性母音の語は、男性母音の語とは異なり、例外なく蒙古文字のθ-で表記されるのはなぜか。女性母音の語においても、男性母音の語と同様に語頭の旧/h-/の大半は消滅し一部分に摩擦音の痕跡がみられるという状況であったと想定するのが自然である。自然ではあるのだが、女性母音の語の場合は、仮に一部分に/x-/もしくは/h-/がみられたとして、それを表記する手段がなかったのである。蒙古文字k-は女性語の表記に用いられる専用文字であり、先に述べたようにこの蒙古文字k-で表記される音が摩擦音化するの清代以降である。この当時は破裂音の/k-/であったため蒙古文字k-を使用して摩擦音の/x-/もしくは/h-/を表記するわけにはいかず、すべて蒙古文字θ-を用いて表記したと理解することができる。いうまでもなく蒙古文字q-は男性母音の語を表記する専用字であり、摩擦音化していたとは言え、この文字を使って女性母音の語を表記するわけにはいかなかった。

以上を要するに『韃靼館雑字』の蒙古文字を復元した人物の音韻は次のようなものであった。

中期蒙古語	語頭のha・he	gha	ge	qa	ke
.....					
韃靼館雑字	*/θ-/(-部/h-)	/g-/	/g-/	/x-/	/k-/

これで主要な検討は終わったのであるが、語頭の音訳漢字/k//k<sup>h</sup>/や/θ/に対応する旧/h-/の語もあるので更に検討を続ける。

7.2. 漢字/k//k<sup>h</sup>/に対応する蒙古文字

漢字音訳蒙古語の語頭に克/k<sup>h</sup>/や急/k/など喉の破裂音を使用している例は98にのぼる。『韃靼館雑字』は漢字音訳蒙古語を蒙古文字に復元しているわけであるが、どのような蒙古文字を対応させるかをみると2種となる。以下に挙げる7.2.1は「克/k<sup>h</sup>/急/k/」などに「蒙古文字k-+女性母音」を対応させるもので大半を占め80例となる。そして7.2.2のように「蒙古文字q-+男性母音」を対応させるものもあり18例となる。

7.2.1. 漢字/k//k<sup>h</sup>/に「蒙古文字k-+女性母音」が対応する場合

漢字/k//k<sup>h</sup>/に「蒙古文字k-+女性母音」が対応するものは80例ある。すべて/g-//k-/が予想される語であり、/k-/については当時未だ摩擦音化しておらず、その点は清代の『清文鑑』(満洲文字)や『蒙語老乞大』(ハングル)と同様な状態を示す。/g-//k-/は正書法では蒙古文字k-で表記されるから、この80例は正書法に叶った例ということになる。

005克017急045客048潤055古069潤074可088客092圭096格

116乞122客128格142乞154古180潤188枯200可226潤230歸  
 240格241格243格244客245客246客247格254古256客267潤  
 275顛276慷290古296格304括339欸340潤345乞389果395古 ⇨ 蒙古文字k-+女性母音  
 421格424可427古440口474可500古504古515古521古532癸  
 545乞551其593阿(マ, 可の誤)618潤631格632古657客665客  
 678客686窟697乞700客704格706潤711闊724闊733客782坤  
 783匡788昆789果792欸796格816客831客833窟840客841客  
 842客844客

### 7.2.2. 漢字/k//k<sup>h</sup>/に「蒙古文字q-(i)+男性母音」が対応する場合

漢字/k//k<sup>h</sup>/に「蒙古文字q-+男性母音」が対応するものは12例、「蒙古文字q-+i+子音+男性母音」が対応するものは6例、計18例となる。

008乞054古084古086凱099坎191乞203乞225凱307匡333侃 ⇨ 蒙古文字q-(i)+男性母音  
 451乞473古661闊759乞763乞786潤801考341潤

この18例はすべて現代のハルハ方言でも男性母音の語として認めることができる。「蒙古文字q-+男性母音」の場合、先の7.1.1のように摩擦音の忽/x/哈/x/などを音訳漢字として使用するのが通例であるが、ここは古/k/凱/k<sup>h</sup>/などの破裂音と対応する。これは『華夷訳語甲種』の音訳漢字をそのまま引き継いだことによるものである。乞/k<sup>h</sup>/が6例あるがこれは「蒙古文字q-+i+子音+男性母音」に対応する。音訳漢字の乞は「蒙古文字k-+i+女性母音」にも対応するから、『韃靼館雜字』の当時、摩擦音のqi/χi-/と破裂音のki/ki-/は異なる音韻として対立していたと考えてよい。さて、341番の潤/k<sup>h</sup>/は中期蒙古語で語頭の/h-/を持つ語である。旧/h-/は摩擦音の漢字/x/で音訳されるのが普通であるが、ここで破裂音の漢字を使用するのは、『華夷訳語甲種』の音訳漢字をそのまま引き継いだためである。341番の単語も先の6例と同様に摩擦音の/χ-/もしくは/h-/であったため、蒙古文字q-(旧/q-/が摩擦音化した/χ-/に対応)で表記したのである。

### 7.3. 漢字/θ/に対応する蒙古文字

語頭が阿/θ/や兀/θ/などとなる語例は多数にのぼるためすべてを挙げることはせず、中期蒙古語で/h-/であったもののみを挙げると、7.3.1および7.3.2となる。

#### 7.3.1. 漢字/θ/に「蒙古文字θ-+男性母音」が対応する場合

435阿604阿773斡 ⇨ 蒙古文字θ-+男性母音

#### 7.3.2. 漢字/θ/に「蒙古文字θ-+女性母音」が対応する場合

これは先の「5. 語頭の/h-/の不記」に係わる部分である。この6例の内、男性母音の語2例(604, 773。435は『華夷訳語甲種』の文例では/h-/であるが語彙編では $\emptyset$ -/である)と女性母音の語3例(132, 446, 747)は、『華夷訳語甲種』語彙編で語頭の/h-/に相当する漢字/x/が用いられていたが、『韃靼館雑字』の音訳漢字では $\emptyset$ -/に相当する漢字に書き換えられた。この6例(435を含める)については復元された蒙古文字でも $\emptyset$ -となっており、少なくともこの部分について漢字表記と蒙古文字表記の間に矛盾はない。

以上、復元された蒙古文字を中心に、そこから伺える蒙古語の音韻状態について述べた。音訳漢字の部分から考察し得ることは多くないが、蒙古文字の部分については考えるべき点がいま少しある。蒙古文字を施した人物の音韻において語頭の旧/q-/は摩擦音化/x-//していた。そして語頭の旧/h-/の大半は $\emptyset$ -/となっていたけれども一部分は摩擦音の/x-/もしくはh-/を保っていたという結論は資料に基づいた一つの見方ではある。この見方をすると、語頭の旧/h-/の一部分は摩擦音を保存していた。そしてその他に語頭の旧/q-/が摩擦音化した/x-/もあったということになる。この二種の摩擦音の関係が問題となる。この点について次節で検討する。

#### 8. 旧/h-/の消失と旧/q-/の摩擦音化

『韃靼館雑字』は、漢字/x//k<sup>h</sup>/で表記した中期蒙古語で/h-/となる男性母音の語を19例含む。以上は音訳漢字の話である。問題はそれを蒙古文字に復元したときに何が起こったかということである。その19例のうち12例については蒙古文字 $\emptyset$ -で復元した。これは単に蒙古文字の正書法によったというのではなく、蒙古文字を付した人物の音韻でもすでに摩擦成分は消失し $\emptyset$ -/となっていたのである。残る7例は蒙古文字q-で表記した。このことから7例は摩擦音を保持しており、それを表記した蒙古文字q-に対応する旧/q-/も摩擦音化していたことがわかる。以上が前節での見方である。そうであるならば、蒙古文字を復元した人物は、中期蒙古語の/h-/に由来する摩擦音と、中期蒙古語の/q-/に由来する摩擦音の両者を同音と見なしたことになる。同音とみなしたからこそ蒙古文字q-で表記したのであろう。このように同音とみなすことは、両者を比較的に良く区別するハルハ方言やチャハル方言など主要な蒙古語方言とは異なるものとなる。『韃靼館雑字』は明の四夷館という公的機関で作成されたものであるからにはハルハ方言やチャハル方言など主要な蒙古語方言に繋がる性格を有していたと見たいところである。両音が文献資料の上で同音であるようにみえることは不都合であり、この不都合を解決しなければならない。わたしは、蒙古文字を付した人物の音韻では、語頭の旧/h-/は既に完全に $\emptyset$ -/となっており、擬古的な異音として旧/h-/に由来する摩擦音があつて $\emptyset$ -/と並存していたと見るべきであろうと考え

ている。旧/h-/に由来する摩擦音の音価が、声門摩擦音[h]であろうと口蓋垂摩擦音[χ]であろうと、既に一種の摩擦音 /χ-/ (旧/q-/から変じたもの) しかもたない人物にとって、[h]と[χ]は同音に聞こえるはずであり発音し分けることも困難であろう。そこで同音と判断して蒙古文字q- (/χ-/) で表記したのである。次節ではここで言う擬古的な異音とは何かということについて述べる

## 9. 擬古的な異音とは

言うまでも無いことであるが同一の社会の中であっても現実に存在する音韻体系は一つではない。過渡期にあつては旧音韻体系を持つ人々と新音韻体系を持つ人々が一つの社会に共存する。また口頭の言語では既に新しい音韻となっている人であっても、歴史的な文字使いや、物語の伝承や宗教や教育をとおして、旧音韻の知識を保持している場合がある。本稿は、旧音韻の知識を擬古的な異音と称する。例えば日本語の“本を読む”の助詞“を”であるが、私は小学校で“を”は/o/ではなく/wo/と発音するのが正しいと習い(私の出身は長野県の北部、50数年前の出来事。その後も同様の教育が行われたようである)、それ以来正しい発音は/wo/だと思ひ込み教科書の音読では/wo/と読んだつもりである。もっとも私自身も周りの子どもたちも普段の会話では/o/と発音していたから、気を抜くと/o/になっていた。その後、“を”/o/と読んでもだれも咎めないで、助詞“へ”を/he/とは読まず/e/と読むように、“お”と“を”は文字のうえでの区別であり、どちらも/o/と読んでも良いらしいとおぼろげながら理解した。もっともテレビの歌謡番組でも/wo/と明瞭な発音で歌われる場合がしばしばあり、やはり正しい発音は/wo/だと一人で得心したものである。『華夷訳語甲種』(1389年)の/h-/にも擬古的な異音と思しきものがある。この文献は蒙古語を漢字音訳した語彙編と蒙古語の詔勅や書状を漢字音訳した文例から成るのであるが、両者の音韻には異なる部分がある。“孫”という語は語頭の/h-/を有する語であり文例は“哈/h/赤”のように語頭の/h-/に対応する音訳漢字を使用する。しかしながら語彙編は“阿/Ø/赤”としており語頭の/h-/は認められない<sup>16</sup>。これは語彙編と文例とで音韻が異なる例である。語彙編は集録語彙からみて口語的であり、文例は詔勅であり文語的と言ひ得よう。なお文例の中にも/h-/の有無について次のような異同がある。“頭”という語を語彙編は“帖<sup>h</sup>里温”とし文例は“赫<sup>h</sup>乞”(失列門書の第9葉左1行目)とする。“赫/h/乞”に相当する文語はekiでありこれは中期蒙古語で語頭の/h-/を有する語である。語彙編と文例では語そのものが異なるため比較はできないが文例の中で/h-/の有無について異同がみ

<sup>16</sup> この点については Mostaert (1977) の索引で知ることができるが早くは Pelliot (1925) に指摘がある。‘ “petit-fils”, écrit ačī dans Hy I et Yy 70, mais toujours hačī dans Hy II. ’ (p. 202)。

られる。

- 蒙古語 …… 傍訳  
赫乞撒<sup>5</sup>刺因 …… 頭月的 (納門駙馬書 第4葉5行目) 「最初の月の」  
赫乞迭延 …… 頭行 (失列門書 第9葉左1行目) 「頭に」  
赫乞連 …… 首先 (勅禮部行移應昌衛 第18葉右1行目) 「初めに」  
赫乞<sup>楊</sup> …… 頭 (勅禮部行移安荅納哈出 第26葉右2行目) 「頭目 (複数)」  
額乞列恢額扯 …… 始自 (誥文 第15葉4行目) 「始めから」

最後に挙げた“額乞列恢(始)”の“額/θ/乞”は、“赫/x/乞”と同源とみてよいであろう。Mostaert1977もそのようにみているようである<sup>17</sup>。これは語頭の/h-/の有無につき文例の中に異同のある例であり、/h-/の有無については早い段階ですでに揺れがみられると言ってよかろう。その/h-/が、口語においていち早く消失し、文語的な異音として特定の語においては口語の/θ-/と並存するという事は有り得ることと考える。

## 10. 結語

『韃靼館雜字』(15世紀末か)は『華夷訳語甲種』(1389年)の音訳漢字の一部を変更しつつほぼそのまま引き写した部分とそれを蒙古文字に復元した部分からなる。蒙古文字を復元した人物の音韻では、中期蒙古語でみられる語頭の旧/h-/は完全に消滅していたが、擬古的な異音として語頭の旧/h-/に由来する摩擦音の存在についての知識は有していた。そして破裂音の旧/q-/については少なくとも語頭においては摩擦音化し/x-/となっていた。そこで蒙古文字を復元するにあたって、語頭の旧/h-/はすでに/θ-/となっていたため蒙古文字θ-で復元したのであるが、一部の語については擬古的な異音として摩擦音を有する場合もあったため旧/q-/が摩擦音化した/x-/と同音とみなして蒙古文字q-で復元した。以上は男性母音の語の話であるが、女性母音の語においても語頭の旧/h-/の状況は同様であり、すべて/θ-/となっており一部の語において擬古的な異音として摩擦音があったと考えられる。しかしながら女性母音の語の場合、当時/k-/は破裂音であったため、蒙古文字k-を利用して摩擦音を表記することができなかった。そこですべて蒙古文字θ-で復元せざるを得なかったのである。

他方音訳漢字の状況は次のとおりである。『華夷訳語甲種』語彙編の音訳漢字には中期蒙古語の語頭の旧/h-/に相当する部分を漢字音/x/(1語は/k<sup>h</sup>/)で表記する例が36あり、『韃靼館雜字』の音訳漢字を書いた人物は、この36のうち5を漢字音/θ/に書き換えた。音訳漢字を書いた人物と蒙古文字に復元した人物の背景にある音韻の状況が同一であるか否か即

<sup>17</sup> ekileküi-eče(額乞列恢額扯)の項の下に、参照として hekile-(赫乞連)を挙げる。

断はできないけれども、蒙古文字に復元した人物の音韻と同様に音訳漢字を書いた人物の口語でも旧/h-/はすべて/θ-/となっていた。/θ-/とはなっていたのであるが、擬古的な表記として漢字/x/を『華夷訳語甲種』より引き継ぎ、変更は最小限に止めて表記したと想定することも不可能ではない。そのうち5例については擬古的な表記としても容認し得ないほどに/θ-/が行き渡っており、擬古的な異音として摩擦音で発音することがなかったため漢字/θ/に書き換えたともみることできる。もしそうであるならば、『韃靼館雑字』（15世紀末か）をはじめ、それ以降の明代の諸訳語の/h-/に相当する漢字/x/は口語から離れた歴史的仮名遣い即ち復古的な表記であるかもしれず、これによって/h-/の有無を論ずる場合は慎重であらねばならないであろう<sup>18</sup>。

〈参考文献(発行年順)〉

Pelliot, P. (1925) 'Les mots à h initiale, aujourd'hui amuie, dans le mongol des XIII<sup>e</sup> et XIV<sup>e</sup> siècles', *Journal Asiatique*, 206: pp. 193-263.

Pelliot, P. (1948) Le Hôja et le Sayyid Husain de l'histoire des Ming, Appendice III: Le Sseu-yi-kouan et le Houei-t'ong-kouan, T'oung Pao (Leiden) 38: pp. 207-290.

山崎 忠 (1951) 「甲種本華夷譯語の音訳漢字の研究 一語彙の部一」 『天理大学学報』 第五輯, 55-80頁。

Mostaert, A. (1977) *LE MAT • RIEL MONGOL DU HOUA I I IU 華夷譯語 DE HOUNG-OU (1389) I*. Bruxelles.

照那斯圖 (1981) 『東部裕固語簡誌』 北京: 民族出版社。

賈敬顏・朱 風 (1990) 『蒙古譯語女真譯語彙編』 天津: 天津古籍出版社。

黃宗鑑 (1993) 「《華夷譯語》的蒙古語詞首 h」 『民族語文』 1993-4, 19-22頁。

中村 淳・松川 節 (1993) 「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」 『内陸アジア言語の研究』

---

<sup>18</sup> 黃宗鑑 (1993) は各種訳語における/h-/に相当する音訳漢字/x/の存否により、明代には/h-/があり、清代の道光年間に至ってほぼ消失したとする。“因此, 從《華夷譯語》到《登壇必究》、《盧龍塞略》, 二百余年間, 這個詞首輔音 h 總的講, 並未脫落。這之後, 再經過二百多年, 即到了清道光年間, 在《蒙古譯語》中, 它則幾乎全部脫落, 僅留殘迹了” (21 頁)。

中村 (2003) は『登壇必究』の專論ではないが、新表記の創出と蒙古語音の表記という問題を論じ、『登壇必究』では語頭の/h-/が/θ-/となっていた可能性のあることを指摘する。“それでは登壇必究訳語においてγα/qa が「噶」「哈」によって書き分けられているのはなぜか。つまり、喉音における h/q/γ の 3 項対立が q/γ の 2 項対立へと変わっていた。そして/qa/の当時の音価は[χa]であったと思われるから、漢字音訳においては「哈[ha]」を対応させるのは比較的自然的なことであった。そこで残る/γα/[ga]に対応する表記のみを「噶」として新たに考案したのであろう。” (3 頁)。

VIII. pp. 1-92, +8pls.

Janhunen, J. (1999) 'Laryngeals and pseudolaryngeals in Mongolic: problems of phonological interpretation', *Central Asiatic Journal* 43/1:pp.115-131.

井上 治(2002)「蒙語老乞大 テキストのローマ字転写と和訳〈卷之一〉」『中國語學研究 開篇』 vol. 21, 107-130頁。

中村雅之(2003)「服部四郎氏の元朝秘史パスパ字本原典説について」『KOTONOHA』第5号, 1-4頁。

吉池孝一(2003)「韃靼館雜字のh-について」『KOTONOHA』第7号, 9-12頁。

栗林 均編(2003)『『華夷訳語』(甲種本)モンゴル語全単語・語尾索引』(東北大学東北アジア研究センター)。

Svantesson, J-O. et al. (2008) *The Phonology of Mongolian*. New York:Oxford University Press. First published 2005.

Janhunen, J. (2011) *The Mongolic Languages*. New York:Routledge. First published 2003.